

獣害問題が里山論に問いかけること

立澤 史郎

獣害問題は、私たちに社会のあり方を問うている。特に、日本の野生動物にとって歴史的にも空間規模としても大きな存在である「里山」を維持してきた社会のあり方を問わなければ、獣害問題の解決もあり得ない。逆に、獣害問題に取り組むことでより里山論はより現実的なものになるのではないだろうか。ここでは、ニホンカモシカの食害問題などの経験を踏まえ、獣害問題の多面性を指摘し、里山論と里山再生活動が獣害問題を組み込むための課題を考えてみたい。

1. カモシカ食害問題の社会的側面（カモシカお犬様論）

最初に、かつて私が携わったニホンカモシカ（以下カモシカ）の食害問題を簡単に紹介したい。これは、国策として進められた第二次大戦後のスギ・ヒノキ単一拡大造林を背景に、特別天然記念物であるカモシカが植林木の苗木を摂食するため全国的に林業被害が発生し、政策（被害補償やカモシカの間引き）を巡って大きな社会問題となったものである。当初「獲るな、殺すな、食べるな」という絶対的保護の対象であったカモシカは、被害者にとっては「お犬様」であり、このため感情的対立が増幅して国相手の裁判まで起きた。そうして、現在の野生生物保護管理行政の出発点とも言える個体数調整という名の駆除が始まり、これに反対する学生が中心となって、苗木に“ポリネット”をかけて（カモシカが下草を食べるよう促して）被害を防ぐ活動（カモシカ食害防除学生隊、現在の「かもしかの会」）が始まった（写真1）。

私はこの活動に参加して、大面積皆伐・拡大造林という政策が全国の里山・奥山をスギ・ヒノキの畑に変えた事実と、そのため各地にできた餌場（草地）がカモシカやニホンジカを増やしていることを知った。また同時に、大面積の植林地で被害対策を行う余

力が既に山村になく、“被害意識”の多くがカモシカよりも都会の人間や行政・政府に向けたものであることも知った。カモシカは、農山村を翻弄してきた都市と都市から生まれた自然保護運動の象徴であり、カモシカ食害問題は、都市と農山村のあり方の問題だったのである。食害防除運動では、参加者との交流による被害意識の軽減も見られはしたが、しかし結局この問題は“解決”したのではなく、農山村が疲弊し、被害者が高齢化することで沈静化してきた。



写真1

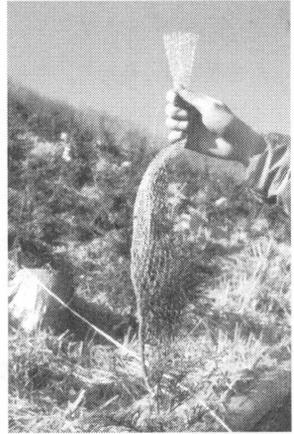


写真1'

【写真1+1'】ニホンカモシカ食害防除作業の様子（滋賀県土山町、1984年頃）。ポリネットを苗木や幼木に被せる活動（カモシカ食害防除学生隊、かもしかの会）が全国的に盛り上がった。多くの参加者が日本の山林と山村の現状を知り、現在は林業体験活動の性格を強めている。右上はカモシカが食べないようにポリネットを被せたヒノキの苗木。

2. 獣害問題の3側面

カモシカ食害問題は、獣害問題の解決には、①野生動物の生態研究と管理・防除技術の開発、②被害認識と社会問題化のプロセスの解明、③地域社会のあり方の議論、という3つのアプローチが必要であることを教えてくれた。今日のワークショップでもこの3点が指摘された。

まず①の生態学や個体群管理（自然科学的側面）については、大井氏が丁寧に説明され、須川氏もカワウの具体的な事例で紹介された。お二人の話で再確認したのは、「獣」（対象動物）の科学的理解、特に分布や密度のモニタリングの重要性だ。ただ、「獣」と較べて、「害」の科学的理解がさらに立ち後れていることは強調しておきたい。野間氏や寺本氏が紹介されたような被害防除の多面的な努力はここ数年ようやく広がりを見せているが、被害の客観的評価法や多面的評価の社会経済学的研究の進展を期待したい。例えば現在の被害に関わる統計（被害面積や被害額）は基本的に経済被害を中心とした申告によっている。しかし西日本に多い小さな私有林での樹皮剥ぎとか、爺ちゃんや婆ちゃんが子や孫に贈るのを楽しみに作っている畑作物の被害（屋久島はこのタイプが多い）は数字に残らない。

多面的評価という点では、近年の「獣害」の定義は、一次産業や人間の健康・安全だけでなく、生態系の構造や機能へも拡張されつつある。今後は、個体（行動）、個体群、群集・生態系など異なるスケール・視点で、「獣」と「害」を多面的・総合的に評価する（例えば農林業被害防除と生態系保全とを摺り合わせる）よう働きかけてゆく必要がある。

②と③（人文社会学的側面）については百合野氏から具体的な話題提供があった。②のポイントは、極論すれば“害を受けた”という認識がなければ「被害」は生じないし、その責任を問う人がいなければ「社会問題」にならないということだろう。誰が何を被害と感じ、どういう状態を解決と考えているか、そこに人為的・社会的要因がどう絡んでいるかを明らかにし、“人間側”からの問題解決のアプローチをもっと強化する必要がある。これは“補償”をどう考えるかという問題とも密接につながる。例えば先の爺ちゃん婆ちゃんの例では、いくら現金で“補償”しても彼らの生き甲斐は戻らないし、逆に動物を根絶させても生き甲斐が失われるかもしれない。この点については、過去の獣害問題での“被害者”たちの発言を掘り起こす作業も必要だろう。

③については寺本氏が分かり易く説明された。ここで改めて思うのは、高度成長に伴う都市拡大の波に中山間地域などの地域社会が切り崩されてゆく中で、第一次産業と野生動物は、同じ基盤に依って立つ社会的被害者だったという点である。獣害問題とは縮小しつつある「パイ」を両者が取り合っている姿であり、そのパイを拵げず争っていたら当然摩擦は激しくなる。先のカモシカ食害防除活動では、そこ（パイを拵げる方策）

に目を向けず、ポリネット作業だけをしていたことへの個人的反省があった。獣害問題の社会的背景を理解し、そこから対策を考えるアプローチもなければ状況は変わりにくいだろう。

以上3つの側面には、それぞれに本質論と技術論があるが、現状のように本質論が相互に関連していない状況では、有効な防除技術は派生しにくい。これらの本質論をあわせて議論できる土俵こそが里山論であり、里山を含めた地域のあり方（土俵）が定まり、防ぐべき被害（相手）が定まり、その上で策が具体化する。ゴールは技術・制度論ではなく、生活者の暮らしぶり・心持ちにあること、それゆえ解決法は一つではないことを、強調したい。

3. 里山論は獣害問題を飲み込めるか？

里山論が獣害問題を飲み込む、つまり、獣害問題を総合的に議論し解決へのアプローチを図る土俵となるには、少なくとも以下の視点が必要だと考える。

①野生動物の多義性。私は人と野生動物との多義的な関係を（汎世界的な資源動物であるシカを例にして）「肉としてのシカ、金としてのシカ、心としてのシカ」と表現する。肉や換金資源だけの付き合いなら家畜化すればよく、野生動物や在来種でなくてもよいが、それでは済まない関係がある。これは「三度に一度は追わずばなるまい」（種まき権兵衛）というフレーズによく表れており、同じ土地で代々関わりを培ってきた共感（いわば共同体意識）のようなものかもしれない。どれか一つで関係を定義するのではなく、関係の多義性・多様性こそ担保されるべきだろう。

②在来群集保全の生態学的意義。里山が原生的自然でないからと言って、人間にとっての環境やレクリエーション機能だけを考えて、そこでの在来種の保全が疎かになるべきではない。むしろ里山は多くの野生動物にとって好適な生息地であり、里山に依存した生活史を送る種も少なくない（図1）。さらには里山だけで維持されている遺存種もある（田端1997など、私は「里山レリック論」と呼んでいる）。里山的環境も原生的環境同様に、生態学的な歴史性を踏まえた評価と保全措置が必要であろう。

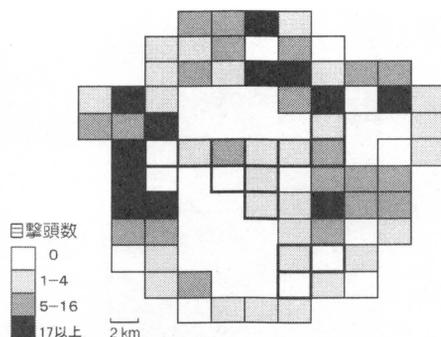


図1

【図1】屋久島におけるニホンシカ（ヤクシカ）の分布。林道および登山道での夜間スポットライトカウント調査での発見数を示す（立澤2005より）。一般的なイメージと異なり、シカは低山帯、特に集落（低地部）近くに多い。しかも低地部ではメスや仔の比率が高く、「里山」を中心に分布・増加しており、屋久島でもニホンシカは里山的動物と言えそうだ。

③ 獣害文化の視点。これは災害文化論の延長として考えることができる。昔話や俗謡（例えば「三年寝太郎」や「種まき権兵衛」）の背景に自然災害や鳥獣害の話が普通にあるように、本来農山村の組織や集落構造は長期的・主体的に獣害に向かい合う中で形成されてきたはずである。今後は、人々の営みとしての獣害対策という観点から歴史を掘り起こし、地域史を再構築する必要がある。

④ 里山「外」との連関。人も動物も、それぞれに奥山と里山を使い分けてきた。生態学的にも（両者から異なる資源を得たり、奥山に分布中心があって里山の生態系が維持されるように）、また精神文化の中でも、奥山と里山は相補的であり、奥山の存在が里山を支えてきたとも言える。例えば奈良公園の「奈良のシカ」は、奥山があることでシカ個体群もその文化的意義も維持されてきた（立澤・藤田2001）。また大阪北摂地方のように奥山のない地域では被害防除と個体群維持のバランスが難しい（川道・立澤1992、写真2）。奥山を忘れた里山論は小手先の議論に陥る恐れがあり、獣害問題の議論には“里山に限らない里山論”が必要だろう。

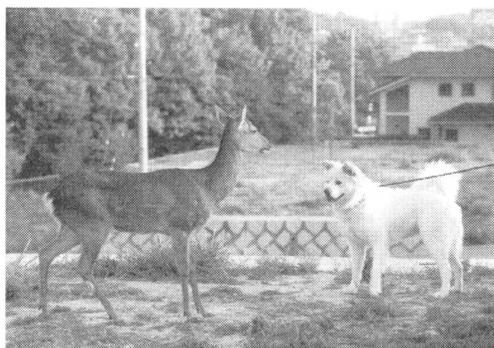


写真2

【写真2】新興住宅地での一コマ（大阪北摂地方）。住宅地の中に新住民が親しむ「里山」が出現したが、そこに孤立したニホンジカは散歩するイヌに随伴するなど奇妙な行動を示した。シカの行動がこの「里山」のおかしさを示しているのかもしれない。

⑤問題の主体化。野間氏が指摘した、“できる対策をしていない”という点は、地域住民が獣害問題を自らの課題として主体化しているかどうかという問題に関わる。問題を主体的に捉えていなければ、主体的な対策もない。カモシカ食害問題では、カモシカの増加よりも、国策としての拡大造林と補助金制度、農林業の斜陽化、農山村の崩壊、という社会的経済的要因が地域住民から主体性を奪った。獣害対策の本質とはこの主体性の回復であり、里山問題そのものだとも言える。寺本氏が紹介された事例のように、いかに生活や歴史を踏まえた地域住民主体の議論と対策を工夫し、問題と対策を内在化させるか（獣害に強い“地域力”を養うか）が問われている。なお、対策の工夫では様々な制度の活用が考えられる。例えば中山間地域等直接支払制度（農水省所管）の弾力的運用は、主体的な獣害防止策の盛り上げに成功している。同様に鳥獣管理でも、今はまだトップダウン的な特定鳥獣保護管理計画制度（環境省所管）に、国費や地方税による部分的費用負担などの工夫が伴えば、地域の主体的な個体群管理を促す効果が生まれるだろう。

4. 里山再生活動の課題

龍谷の森のように、近年は教育機関やNGO・NPOによる里山の維持再生活動が盛ん

である。これらの「里山」を獣害問題の議論や解決策試行の場とするための課題を考えてみたい。

- ① 再定義。森・農地・草地と野生動物の暮らしがあり、それらを利用する人の暮らしがある場所を、私は里山だと考えている。この認識だと、休日に遠隔地からやってくる市民が管理している「環境林」や、人為による遷移の停滞や退行がある（植物生態学的定義による）管理された二次林をすぐに里山とは呼べない。この定義の是非は別としても、ただ残っていたからというだけでなく、その活動で何をどこまで復元（形）・再生（機能）・創造（関わり）するか、整理しておく必要はあるだろう。
- ② 地域計画への参画。スタッフは、内向きの活動だけでなく地域計画にコミットし、そこで自らの土地を位置づけなければ、広域を移動する野生鳥獣の保全や利用はままならない。その地域計画では、少なくとも集水域単位で、様々な線引きや集落構造の再デザインも含めた議論が必要だろう。なお今回のワークショップでは人材の確保や育成の話がなかったが、戦略的、実験的な「里山」を育てるには、各分野の専門家が寄り集まるだけでなく、分野横断的・統合的な視野で地域計画にも参画するマネージャーが必要だろう。
- ③ 連結と協働。例えば龍谷の森の面積ではイノシシが5頭、シカが20頭くらいしか暮らせない（しかもシカが下草を食い尽くしてしまう）としても、他の「里山」と連結させることで、生息し続ける可能性が出てくる。連結の仕方は、種や群集ごとの議論と総合化が必要なマルチスケールの問題であり、生態学や地域計画論の新たな課題でもある。また、そういう試行錯誤の経験の共有や、特に近隣の農林家との協働は、地域単位での新たな「獣害対策」に繋がるに違いない。

結局のところ獣害問題とは、野生鳥獣を多義的に利用できる地域や国をどう再生するかという、地域作りや国作りの問題である。だからこそ里山論が獣害問題の土俵になりうるのであり、そのためには人と野生動物との関わり（＝里山の意味）を問い直し、両者の関係や生活空間を再設計する作業、いわば「現代里山論」の構築が必要だろう。そこでの議論は、本質論としては文明論であり、技術論としては生態系の保全と利用を前提とした地域計画論である。そしてこれらの実践の核心は、生活の場としての里山で鳥獣害と闘う（問題と対策が内在化された）集落を維持再生する社会運動だと言えるだろう。

文献：

- 川道武男・立澤史郎．1992．大阪府下のニホンジカの数と分布（1991年），34pp．大阪府．
- 立澤史郎・藤田和．2001．市民調査を通じて見た「奈良のシカ」保全上の課題．関西自然保護機構
会報 23（2）：127-140．
- 立澤史郎．2005．照葉樹林帯のニホンジカとどうつきあうか？－屋久島での取り組みから－．日本
生態学会関東地区会会報54：41-53．
- 田端英雄（編）．1997．「エコロジーガイド里山の自然」保育社，200pp．

立澤 史郎（たつざわ・しろう）

北海道大学大学院文学研究科地域システム科学講座助手。専門は動物生態学・保全生態学・環境科学教育。1959年大阪府生まれ。神戸大学農学部・大阪教育大学大学院・高校教員を経て、京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（理博）。学生時代から野生動物と人間社会の共存をめざすNGO活動（かもしかの会関西、CITES市民連絡会、奈良のシカ市民調査会など）に参加し、「市民調査」によるシカ・カモシカの実態把握とそれを元にした保全策の提言を続けてきた。その後足かけ15年にわたり南西諸島の無人島・馬毛島のニホンジカ（マゲシカ）を追い、現在は屋久島で生態系被害と農作物被害を起しているヤクシカのモニタリングと管理策提言に携わる。また、ヌートリア（本州）・ミンク（釧路湿原）・アライグマ（知床）など外来哺乳類の現状調査と対策提言にも携わっている。
